

アユの友釣りとは魚病の関係 ～エドワジエラ・イクタルリ感染症は高水温期に影響あり～

(魚病研究センター 免疫グループ：寺島 祥子)

アユは内水面の代表的な水産資源である。アユが縄張りを形成する習性を利用した友釣りは釣り人に人気の漁法で、漁協の重要な収入源となっている。天然河川のアユで発生する病気として、冷水病やエドワジエラ・イクタルリによる感染症が知られている。特にエドワジエラ・イクタルリ感染症は2007年に国内の天然アユで初めて発生が確認された比較的新しい細菌病である。この感染症は夏場の水温の高い時期（水温20℃以上）に発病しやすく、天然アユの大量死を引き起こすことから、問題となっている。また、この病気にかかると、アユの元気がなくなり、友釣りで釣られにくくなることが懸念されているが、実際にこの病気と友釣りでのアユの釣られやすさの関係はよく分かっていなかった。そこで、当所と中央水産研究所の研究チームで、天然河川のアユでエドワジエラ・イクタルリ感染症と釣られやすさの関係を経時的に調べたところ、その関係が明らかとなった。

河川の平均水温とアユのエドワジエラ・イクタルリの保菌率には関係があり、河川の平均水温が高いほど、エドワジエラ・イクタルリ

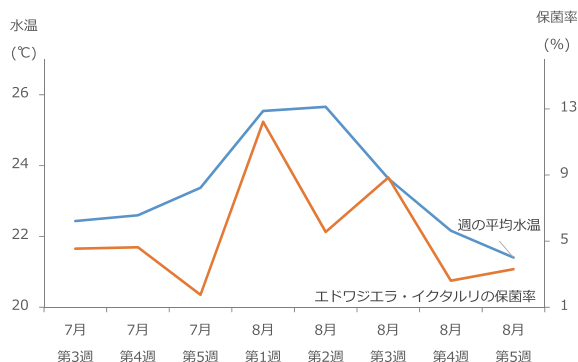


図1 保菌率と水温の推移

週の平均水温が高い8月第1週から8月第2週にかけて、エドワジエラ・イクタルリの保菌率が高くなっていた

を保菌しているアユの割合が多かった（図1）。さらに、河川の平均水温が最も高い週の保菌率は、友釣りされたアユに比べて友釣りで釣れなかったアユで約2.4倍高かった（図2）。これは、アユがエドワジエラ・イクタルリを保菌していると、少なくとも水温が高い時期には友釣りで釣られにくくなっていることを示している。

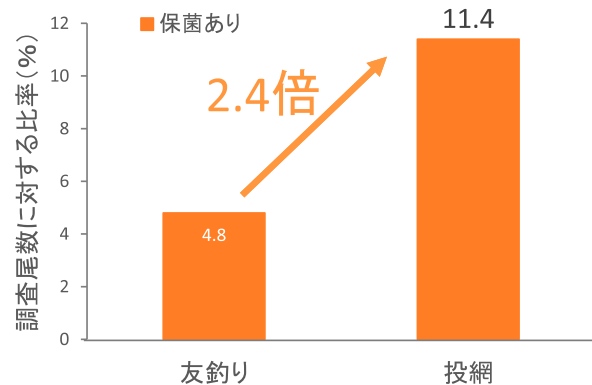


図2 高水温期における保菌率の比較

週の平均水温が高い週では、友釣りで釣れた個体よりも友釣りで釣れなかった個体（投網個体）でエドワジエラ・イクタルリを保菌していた個体の比率が高かった

これまでエドワジエラ・イクタルリによる遊漁への悪影響として、天然アユの大量死が知られていたが、本研究の結果により、大量死が起きていなくても釣果に影響していることが分かった。エドワジエラ・イクタルリによる感染症を防ぐためには、原因菌を河川に持ち込まないことが重要な対策となる。アユの感染症対策を効果的に進めるために、関係者の皆様のより一層のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。